FLORA KANAGAWA

Nov. 20. 1997 No. 45

神奈川県植物誌調査会ニュース第45号
〒250 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
振替 00230-5-10195

イワユキノシタ。奥湯河原の藤木川源流にて(1997年5月19日。勝山輝男氏撮影)。

山田文雄：アレチキンギョソウの発見..................................................496
金子紀子：ジョウシュウカモメヅル(ガガイモ科)を見つけて........................496
長谷川義人：ヤブムグラの栄養繁殖について.....................................500
佐々木あや子：丹沢山塊のナベワリ..........................................................502
勝山輝男：忘れ物................................................................................502
勝山輝男：湯河原の植物調査(1)..............................................................502
勝山輝男：芦ノ湖にヒロハノエビモ(ヒルムシロ科)が健在......................503
山崎泰子：横浜市内のタシロラン.............................................................503
野津信子：トゲオナモミ.......................................................................504
田中一雄：アマギイノデ........................................................................504
田中一雄：コケミズ................................................................................506
奥津均：ヌマツルギク・続報.................................................................506
編集後記.................................................................................................506

一 495 一
アレチキンギョソウの発見
（山田文雄）
1997年5月21日、横浜市神奈川区出田町ふ頭の貨物線の脇で、高さが人の膝ぐらいで、全体がカワラマツバ（アカネ科）に似て、桃色の小さな花をつけている植物が目に入った。花の形はマグノハグサ科のウにランに似ているが、色と大きさからカワラマツバにも似ているように思えた。採集したものを勝山輝男先生に見させていただいたところ、ユーラシア大陸に分布するマグノハグサ科のアレチキンギョソウAntirrhinum orontium L.であると教えていただいた。


は、他の植物はあまりなく、周辺にシマスメノヒエの大株とアオスケ、ネズミムギ、スズメノエンドウなどが、わずかに点在していた。採集する際に、手に持った茎を傾けると、実におびただしい細かい種子が、果実の穴からこぼれ出てきた。本種の果実はヒヨコに似ていて、それが直立する茎の葉腋ごとについているのは、特徴である。また、花弁の色が白色に近いものが数株か見受けられた。各部分の特徴は右図のとおりである。

文 献
久内清孝、1961. 名古屋中心の外来雑草。植物研究雑誌、36: 380-383。
植村修二、1984. 清水港に帰化したアレチキンギョソウ. レポート日本の植物、(22):13。
太田久次、1985. 三重県帰化植物誌、149pp. ムツミ企画。

ジョウシュウカモメヅル（ガガイモ科）
を見つけて
（金子紀子）

はじめに
ジョウシュウカモメヅルCynanchum sublanceolatum (Miq.) Matsum. var. auriculatum (Franch. et Sav.) Matsum.は「神奈川県植物誌1988」に「稲根を基準産地として、コパノカモメヅルvar. sublanceolatumより葉の先が長く鋭く尖り、花が12-20mmと大きいものだが神奈川県植物誌や文献には顔を見せず今回の調査でも確認していないので再検討を要する」と記載されている。筆者が1997年9月3日に採集したものがジョウシュウカモメヅルであったのでその経過を報告する。

生育地について
横浜市金沢区にある称名寺の裏手に散策路で二分されたアシ原がある。数年前からそのアシ原の中にコパノカモメヅルが1株あるのは知っていたが、1997年5月31日に散策路をはさんだ反対側の草地の中にコパノカモメヅルに似たものが8株あるのに気がついた。
た。その場所は数年前までは湿地で春に
はセリが生え、数多くの人がセリ摘みに訪れ
ていた。夏になるとヨシが生い茂り、秋に
はミゾソバがヨシの隙間に咲き乱れてい
た。
ところが1995年くらいから、あまりにも
多くの人が根こそぎに持っていくためにセ
リが減り、踏压のためか陸化が進み、ヨシが
ススキに代わりはじめていた。1997年初夏
にそのススキを敷き詰めわりに刈り取った
人がいて、急に明るくなった草地にコバノ
カモメヅルなどが目立つようになったもの
と思われる。
ジョウシュウカモメヅルとの出会い
8株のコバノカモメヅルらしいものは、7
月中旬から花が咲き出した。8株のうち暗紫
色の花が付いたものが6株、白色の花のもの
が1株、花の中央部だけが紫であるほは汚白色
のものが1株あった。これらすべての花径を
計ったところ1.2～1.5cmであった。これに
2.0cmのものも数株営いていた。これらの標
本及び写真を高橋秀男先生に送り同定して
いただき、コバノカモメヅル、アズマカモ
メヅル var.albiflorum (Franch. et Sav.) H.Hara、
アズマカモメヅルの品種であると判明し
た。
その後さらにコバノカモメヅル5株、アズ
マカモメヅルの品種2株を見つけた。草むらを
丹念に捜さなければ更に多くの株が見つけられ
ると思う。称名寺のものは、円海山のコバ
ノカモメヅルに較べると花径が大きいこと
が気になり、その後も通い続けていたが、
コバノカモメヅル、アズマカモメヅルなど
の花期が終わりに近づいた9月3日、今まで
葉ばかり茂っていた株が開花していた。そ
の株は、花色は暗紫色であったが一見した
だけで明らかに一輪ずつの花が大きく、花の集まりが直径4cmくらいの球状で、ボリュームがあり、今までに見たもの
とは違うという印象を受けた。花径を計っ
たところ1.8～2.0cmあり、ずい柱の大きさ
は他のものとほとんど同じ大きさで、花被
片が長かった。葉の形はコバノカモメヅル
の葉先の尖方に較べるとなめらかに細
まっていて、葉は大きく3×15cmあり、色
は濃緑色で、両面に短毛が生えていてさら
ついた。葉の大いきものも小さいものも、
基部は浅く心形にくびれていた。花柄、小
花柄には長い白毛がはえている肉眼でも
はっきり見えた。標本の同定を高橋先生に
お願いしたところジョウシュウカモメヅル
であった。「葉幅やや広く長卵形をなし基脚
表1. コバノカモメツル類の形態変異(調査日1997.7.15-9.20)

| 種名                  | 花色          | 花径 (cm) | 花柄 (cm) | 花序 (果實等の比) | 叶柄 (cm) | 叶身 (cm) | 花柄の
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>1.5-1.7</td>
<td>2-3</td>
<td>2/3-1.5倍</td>
<td>0.5</td>
<td>1.5×5</td>
<td>少ない</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>1.5-1.7</td>
<td>2-3</td>
<td>2/3-1.5倍</td>
<td>0.5</td>
<td>1.5×5</td>
<td>少ない</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>1.8</td>
<td>0.5-1.5</td>
<td>2/3-1.5倍</td>
<td>1.2-1.5</td>
<td>2.5×11</td>
<td>無し</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>1.2</td>
<td>2-3</td>
<td>2/3-1.5倍</td>
<td>0.8</td>
<td>2×5</td>
<td>有り</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>1.5</td>
<td>2-3</td>
<td>1/2以下</td>
<td>0.5</td>
<td>2.5×11</td>
<td>有り</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>0.7-1.2</td>
<td>2.5</td>
<td>1-1.5倍</td>
<td>0.5</td>
<td>1.3×5</td>
<td>無し</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>0.7-1.0</td>
<td>2.1</td>
<td>1/2-2/3</td>
<td>0.7</td>
<td>1.4×6</td>
<td>有り</td>
</tr>
<tr>
<td>コバノオカメズル</td>
<td>中央のみ紫の白花</td>
<td>0.7-1.0</td>
<td>2.5</td>
<td>1/2-2/3</td>
<td>0.5-0.7</td>
<td>1.4×6</td>
<td>無し</td>
</tr>
<tr>
<td>アズマオカメズル</td>
<td>黄白緑色</td>
<td>1.0-1.4</td>
<td>2-3</td>
<td>2/3-1.5倍</td>
<td>0.7-1.5</td>
<td>0.7×1.5</td>
<td>有り</td>
</tr>
<tr>
<td>アズマオカメズル</td>
<td>中央のみ紫の白花</td>
<td>1.0-1.5</td>
<td>2-3</td>
<td>1/2-2/3</td>
<td>0.5-1.0</td>
<td>2.5×11</td>
<td>有り</td>
</tr>
<tr>
<td>アズマオカメズル</td>
<td>中央のみ紫の白花</td>
<td>1.0-1.5</td>
<td>2-3</td>
<td>1/2-2/3</td>
<td>0.5-1.0</td>
<td>2.5×11</td>
<td>長い</td>
</tr>
<tr>
<td>ジョシュワオカメズル</td>
<td>暗紫色</td>
<td>1.8-2.0</td>
<td>4</td>
<td>1/2-2倍</td>
<td>0.5</td>
<td>1×3</td>
<td>3×15</td>
</tr>
</tbody>
</table>

湾入し両面に毛があり花梗と小花梗とには先に向かう長い密毛がある。花は大きく濃紫で（中井，1937）という説明に合致していた。

9月20日現在，ジョシュウカモメツルは開花状態で実がついて始ているのもあろう。果実はコバノカモメツルに酷似し，初期はみずみずしい黄緑色，やや成長したものには粉を吹いたような緑色で，0.8X6.5cmあった。ジョシュウカモメツルはコバノカモメツルよりも8mほど北側，林縁からは15mほど離れた所に生えていた。

称名寺に観察したすべての株に共通する事は以下のとおりである。
(1) 小花柄の内の一本が長く伸び，その先に更に花序を付ける二度伸びをしているように見えるものが半数以上あった。
(2) 花付きはまばらと言われているが（村田，1994）花は一本の花柄に15から20つしていていた。
(3) 袋果は単生と言われているが（村田，1994）単生のものと双生のものがあった。双生のものは120～160度の角度で開いていた。ただし双生のものは単生のものの1/4～1/10の割合であり単生のものに較べると少ない。
(4) 穴果の割合は少なく，10花序に1個程度である。実ができ始める頃になると黄色いキャニバブルームがびっしりつき，時には株が枯れるほどになる。そのために種子が完熟できる割合は更に少なくなる。
(5) 茎や花柄，葉柄などを切ると白い汁が出る。
カモメツルの仲間の根について

花を咲かせている株の近くに草丈が5cm未満のものを始め多数の実生苗があり、いくつか掘り起こして見たところ次のことことが分かった。1年生のものは直径2mm以下の白から薄茶色の根が伸びていてその先端部に細根がついていた。中2〜3本の根は基部が薄紫までしていた。

草丈が15cm程度のやや大きい苗の根は前年度までに茎が出ていたと思われるかぶ状のものが2個ついていてその先端から今年の茎が出ていた。おそらく3年目の苗であろう。抜き取らずに置いていたら今年開花しただろうと思う。

草丈が80cmのものは前年度より大きいかぶ状のものが3個ついていて5mmくらい離れたところから茎が出ていた。紫色を帯びた根は茎の付け根に多かったがかぶ状のものの所からも短いものが少し伸び始めっていた。

根の太さも一年生のものに比べるとかなり太く1.5mm程度であった。実生苗のためこの株がどの種類の花を咲かせるものかは不明であるが毎年冬に地上部が枯れるたびにその先から新しい茎を伸ばすようである。

おわりに

称名寺のコバノカカモメツルは花の色が株ごとに微妙に違っている。青みの強い暗紫色、赤みの強い暗紫色、花被片の外側が汚白色から薄い茶色で内側が暗紫色のため陽のあたっている時は茶色を帯びた紫に見えるものなどがあった。アズマカカモメツルの一品種である中央だけが紫の花にも、紫部分が多いもの少ないもの、雌しべが全部白いものと中央だけ星形に薄桃色のものなど様々な花色を観察できた。また茎や花柄に毛があるものと無いものがあった。円海山の尾根部の草地にあるコバノカカモメツルに較べ、称名寺のものは花径がやや大きい。この原因としては尾根道とやや湿地という生育環境の違い、海に近いこと、アズマカカモメツル、ジョッシュウカカモメツルがあるために少しずつ交配して様々な形態が生じたなどが考えられると思う。また今年だけ、称名寺だけの観察から断言するのは時期尚早かも知れないがジョシュウカカモメツルはコバノカカモメツルよりも1ヶ月以上遅れて開花した。他の場所でコバノカカモメツルを観察された方がその近くに花が咲いていない葉だけの株を見つけられた場合、時間をおいて観察されればジョシュウカカモメツルが各地で見つかるのではないかと考えている。

謝辞

筆者は全くの素人で、花の大きさや葉の形が見えた時印象などしか分からず、自分が見たものが何であるのか決めることすらできなかった。お忙しい中いろいろとご指導下さった高橋秀男先生に深く御礼申し上げる。

参考文献


ヤブムグラの栄養繁殖について

（長谷川義人）


この種は国や神奈川県のレッドデータでも絶滅危惧種に指定されている。分布は神奈川県、千葉県、茨城県、埼玉県、東京都の関東南部地域であって、横浜市内では緑区、青葉区、都築区などにはあるものの、やや稀産する。大和市などに記録がある。

1996年9月29日には横浜市緑区寺山町の四季の森公園内のヤブムグラ自生地に行き、その生態を観察した。ここでは大変に密集し、成育地で1株の株基から3〜12位の枝

-500-
（シューチング）を分けて、先端近くの葉腋からさらに2〜6節ある花序枝をだして、時にその節からさらに枝をだして花を着ける。9月は果期で枝条は倒伏していて、標本例に丁寧にこの枝を掘り挙げたところ先端部が取られずに残るものがあるので、先端部を再掘りに用いて採取したところ、接枝したところから発根して、新苗が生育しているものがあった。
この状況からみて、ヤブムグラは種子による繁殖の他に栄養繁殖もおこなっていることが、想像できる。なお枝の先端部の茎の直径は0.3mmから0.6mmと細く普通の採取ではすぐ切れててしまう。標本No.15338（長谷川）のデータを参考までに左下表に示す。
標本は雑種などの心配がないので同一の番号で枝番1〜8までの8枚である。
同じ生態のオオバノヤエムグラが同様かどうか筆者には不明である。

追記：フランシェ・サヴァジェの『日本野生植物目録』の頁と発行年は他書の引用と異なる。総覧（1931）、総覧補遺（1936）、集覧（1952）ではII: 393（1876）となっている。筆者は1940年の植物文献刊行会（京都）の複刻版によった。小原敬氏によればStafleu et al.では、この書のII: part. 2.の発行年は1878年とされている。（県植栽1988）
（Sep., 9, 1997記）

追記2：本稿と同じ内容の報知が過去にあることを勝山輝男氏から9月11日にお知らせいただいた。調べたところ「野草15巻」No.9（Dec., 27, 1949発行）木人独語（一）「ヤブムグラの面白い点」榆山庫三にある。
（Sep., 11, 1997記）

<table>
<thead>
<tr>
<th>重複標本No.</th>
<th>茎数/株</th>
<th>発根</th>
<th>節数*</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>15338</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>-1</td>
<td>10条</td>
<td>なし</td>
<td>----- (2株状)</td>
</tr>
<tr>
<td>-2</td>
<td>6条</td>
<td>あり</td>
<td>16節目</td>
</tr>
<tr>
<td>-3</td>
<td>6条</td>
<td>あり</td>
<td>24節目 新苗</td>
</tr>
<tr>
<td>-4</td>
<td>3条</td>
<td>あり</td>
<td>21・22節目</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>あり</td>
<td>20・21節目 新苗</td>
</tr>
<tr>
<td>-5</td>
<td>11条</td>
<td>あり</td>
<td>22・23・24・27節目</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>あり</td>
<td>19・21節目</td>
</tr>
<tr>
<td>-6</td>
<td>3条</td>
<td>あり</td>
<td>13節目</td>
</tr>
<tr>
<td>-7</td>
<td>5条</td>
<td>あり</td>
<td>14・15節目</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>あり</td>
<td>13・14・15・16・17節目</td>
</tr>
<tr>
<td>-8</td>
<td>5条</td>
<td>あり</td>
<td>16・17・18節目</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*株基からの発根部までの節の数
丹沢山塊のナベワリ

（佐々木あや子）

1997年6月29日、秦野市の表丹沢山県の森
登山訓練所付近（秦野－4）で、ナベワリを確
認し、写真を撮影したので報告する。
「神奈川県植物誌1988」によれば、ナベワ
リの分布は、湯河原－2.箱根－5.足柄－
1.3の県西部・箱根山塊に限れていた。暖
地の林床に生育し、その分布は、本州（神
奈川県以西の太平洋側）、四国、九州、奄
美大島となっている。

ところが、古く1961年の林業試験場研究
報告第133号の「丹沢山塊の植物調査報告」
（林・小林・小山・大河原）には、「ナベワ
リの分布は、関東南部、紀伊半島、四国、
九州で、大体平気温15℃線以南に生じ、
丹沢山は北限および東限地のようなであ
る。丹沢山塊では、大山のほか、札幌、幽
神、世附にまれに生じるにすぎない。」と
記載されている。すなわち1961年頃には、
丹沢山塊でもその分布が確認されていたこ
とになる。

しかし、それ以後、1979年から1988年ま
での神奈川県植物誌の調査、1993年から
1995年までの丹沢・大山自然環境総合調査
でも、丹沢山塊では生育が確認されていな
かった。今回の大山－4での確認は、この地
がナベワリの分布の北限および東限地にな
るが、さらに調査を進めれば、かつての分
布地である大山での再発見も期待できるか
もしれない。

忘れ物

（勝山輝男）

先日、植物採集ニュースのバックナン
バーをなめていたところ、90巻の68ページ
（1977年）に、次の2種の神奈川県への帰
化の報告が目についた。どちらも「神奈川
県植物誌1988」ではふれていない種類で
ある。「神奈川県植物誌1988」では標本に基
づく分布図を作成するため、標本整理に多
くの時間を費やした反面、文献のチェック
がおろそかになり、忘れ物がいくつかで
きてしまった。他にも同様のケースがある
ものと想像される。気がついたらその都
度、忘れられないうちにFLORA KANAGAWA
に載せておこうと思う。

フランスゼリ
Bifora tecticulata (L.) DC.

1976年5月に森茂弥氏が横浜市中区山下
埠頭の道床で採集され、同誌でセリ科の日
本新産帰化植物として発表された。標本は
国立科学博物館に収められているという。

ヤンバルツルマオ
Pouzolzia zeylanica Wedd.

これも森茂弥氏が1976年5月に横浜市神
奈川区出田町の埠頭で採集された。初島住
彦氏に標本を送り、ヤンバルツルマオと同
定されたという。別名ツルマオモドキ。伊
豆青ヶ島、奄美、沖縄、台湾、熱帯から亜
熱帯に分布するイラクサ科植物で、神奈川
県には記録がなかった。これも国立科学博
物館に標本が収められているらしい。

湯河原の植物調査(1)

（勝山輝男）

県立博物館の自然系が小田原に移ることに
あわせて、長年住み慣れた横浜市緑区を去
ミヤコイヌワラビー Athyrium fragulum Tagawa

植物籍1988の調査では見出されず、県内からは失われたものと考えられていたが、1995年に田中一雄氏が南足柄市で採集され、FLORA KANAGAWANO.42で30数年ぶりの再発見を報告されている。湯沢原では1950年代に採集された標本が県博に残されているが、その後の消息は不明になっていた。今年7月14日に湯沢原パークウェーに近い藤木川の源流で、10月13日に静岡県周辺に近い千歳川の上流域で見出した。どちらも放棄されたワサビ田が近くにあり、沢筋の水の豊富な岩の間に生えていた。

芦ノ湖にヒロハノエピモ Potamogeton perfoliatus L.（勝山輝男）

ヒロハノエピモ Potamogeton perfoliatus L.は、神奈川県植物目録（1933）や神奈川県植物誌（1958）に鎌倉・箱根とあり、県博に1926年に沢田武太郎が芦ノ湖で採集した標本が残されている。しかし、その後の記録がなく、絶滅したものと考えられていた。箱根町の中村和義氏が1996年8月6日に芦ノ湖西岸の白浜近くの岸に打ち上げられているのを採集され、芦ノ湖に健在であることが確認された。

横浜市内のタシロラン（山崎泰子）

1997年6月29日、横浜市中央区公田町の丘陵の林床において、約20数本の腐生植物を見た。全体が白色で白カビが付着し、白さが際立っていた。茎は直立、総状花序を頂生、最上部の花は上向きのものが多く、下方にいくにしたがって下向き（下垂）であった。根茎は、楕円状の球で中は空洞のような感じで、外側はやや固く鱗片がある。高さは10〜30cm強い。図鑑で調べるとタシロラン Epiogium roseum Lindl.の特徴と一致している。しかし、分布の点で気になり
トゲオナモミ

（野津信子）

9月18日、この4月に開通した都市計画道路、今町戸塚線(横浜市栄区小菅ヶ谷町)の歩道の植樹柵のツツジの植え込みが見えないほど野草が生い茂っている中に、やや白っぽい見慣れない草を一本見つけた。それが、トゲオナモミXanthium spinosum L.であった。草丈約1m、幅も1m位に分枝し、刺だらけで一枝折れるのが苦労した。各葉腋に3岐した15mmの鋭い刺と1個ずつの果包が、各枝の先にはオナモミに似た数個の雄花がついていた。

アマギイノデ

（田中一雄）

1995年2月18日（晴）、南足柄市荏野の沢に沿った林道脇の斜面を登ったり下ったりしながら観察して行きました。エリアはMIA-3です。寒さの最中なので見られるシダの種類も少ないのですが、灌木が落葉しているので見通しがよく歩きやすいのが冬のよさでしょう。

マツザカシダの大群生地がありましたので、その周辺にたくさんあるオオバノイモトソウとの雑種があるかどうか眼を向けましたがやはり見当たりませんでした。マツザカシダとイノモトソウの雑種はすでに発見されてヌスマイモトソウと名前が付いていますが、オオバノイモトソウとの雑種はまだ発見されていないので、あるいはと思って捜したのですが、これだけの生地でもみつからないのはやはりアポガミー同志の両親からの雑種は出来にくいのでしょうか。標高300mほどの北面したスギ林の緩い斜面に、イノデとイノデモキの混生地がありました。このような混生地では両者の雑種のアマギイノデがあるかどうか必ずチェックするのを習慣にしているのですが、今までは何十回も観察してきましたのに、アマギイノデには全く出会ったことがありませんでした。

今回もチェックを始めて十分ほど経ったとき心臓がドキんとしました。群落の中に一株だけ葉のツヤがイノデとは少し違うイノデが眼についたからです。全長1m弱で外観は葉身がやや細くイノデモキに似ているのですがそれより大きく、イノデと同じ大きさなので、イノデのようなピカッとしたツヤでなく、葉に厚みを感じさせるような鈍いツヤ。いままでに何回も間違えてがっかりして来たハタジュクイノデに比べて、緑色の色調が少し違って見えました。アマギイノデだとひらめきました。カッ！と頭に血が上り早く採らないと消えてしまいそうな気がして、株もとに跳び込み葉を三枚切り取り、それをポ
り袋に仕舞い込んで、やっと落ち着きました。それでもまだハタジュウクイノデかも知れないと思う気持ちが抜けきれず、地面に座ってジックリと観察してその特徴をノートに記入しました。

帰宅後に参考書、関連専門書をさせていただきましたアマギイノデ？を拡げて観察を始めました。
まずシラスは冬なのにシュリンクした状態で固着しており、はせていないので雑種性には違いありません。葉柄の鱗片は柔らかくてツヤが少なく、やや褐色がかった広披針形～披針形で、下部の鱗片のうち褐色がかったものもあるが、ボヤットとしていて明瞭ではありません。ルーペで観ると、葉柄は細裂した歯状の銅鉄、イノデモドキより重銅鉄は少なく、イノデよりも重銅鉄が多いくらい細裂が小さい。葉軸の鱗片は披針形でアイアスカイノデより長く柔らかく銅鉄が多く、葉柄も葉軸も鱗片の量が少なく葉柄が見えないほどである。一方ハタジュウクイノデの葉柄の鱗片はやや披針形～狭卵形でツヤがあり、バリリとした気がアイアスカイノデの影響を感じる。重銅鉄は少々多いのが毛裂はしていない。葉柄下部の鱗片には明瞭に桃色の縞が大なり小なり必ず見られる。葉軸の鱗片は披針形で銅鉄は大きいが出方が強く質が硬くこれもアイアスカイノデによく似ています。結局アマギイノデ？とハタジュウクイノデとの鱗片の比較で、両雑種が両方の母種イノデモドキの特徴を共有しつつ、なおしつつの一方の親のイノデとアイアスカイノデの影響差が認められました。胞子囊と胞子を検証すると、まず胞子囊は球状に熟しておらざる太鼓形のままで、中に胞子がほとんど入っていません。少ない胞子も定形が見られず、ほとんどイレギュラーでした。これは雑種性のサに特徴です。葉身上中部の鱗片に付着する胞子の位置はイノデより外側ですがイノデモドキより内側で、もちろんアイアスカイノデより内側に位置し、どちらかと言えばイノデ的です。葉身下部では辺に寄り、耳片と裂片の上部優先に着ています。下部羽片で耳片や裂片上部に優先的に着性質はハタジュウクイノデにも見られる特徴で、これはイノデモドキです。

葉の色はハタジュウクイノデは鮮緑色～帯黄緑色ですがそれよりもやや緑が濃いようです。葉形は長三角形でハタジュウクイノデの細三角形と、先端の尾状の伸び方は多少が違うようです。葉身の幅はアマギイノデ？の方がやや広く、全長もアマギイノデ？の方がやや広い傾向が見られましたが、葉形、葉幅、全長ともこれらはもっと多数を検しないと完全な差は判りません。葉面全体はアマギイノデ？の方が毛深く、ハタジュウクイノデはツルとした感じがみられます。

両者を比較した結果、差異点は鱗片の質、色、形、胞子囊の位置、葉色、葉形、大きさや全体の印象などに、いまで見て来たハタジュウクイノデとの差が認められて、今回発見したイノデはアマギイノデと考えられます。

1995年2月25日（時）、先週アマギイノデを発見した場所から観察を始める。だんだんと標高を上げ明神林道を越えて矢倉沢の領域、MIA-1の範囲に入れて行きました。標高は約450m、胸高径40～50cmのスギが植林されている北向きの斜面で、イノデ、アイアスカイノデ、イノデモドキが混生していました。それらの間から雑種を指しながら観察して行きますと、ドウリョウイノデがまず隠れていました。濃緑色でひとときわ大型なのですぐに判り、比較的できやすい雑種らく点在しています。ハタジュウクイノデがありました。これも大型ですがドウリョウイノデのようにガッシリしていないので判別できませんが少ないシダです。おかしいと感じたシダは葉を裏返して必ずソーラスを見ます。ソーラスがはじけているれば雑種の可能性が高いのでそのシダ全体を総合的に観察して判別します。二本のスギの間に1mを超す大きなイノデがあり、近寄ってみると株も大きく葉を20枚
も収出していました。よく観察すると先週
荏野で発見したアマギイノデと全く同じ印
象でした。2週続けて珍しいアマギイノデを
見つけることができたとは、全くラッキー
としか言いようありません。ただ荏野の
株はやや弱っている感じのするのが気がか
りですが、矢倉沢の株は元気一杯なので林
が伐採されないかぎり安心です。
帰宅後標本を作成し静岡市の志村義雄先
生に送り同定をお願いしたところ、両方と
も間違いないアマギイノデですとの御回答
をいただきました。
神奈川県でのアマギイノデは「神奈川県
レッドデータ生物調査報告書 1995 神奈
川県立生命の星・地球博物館」P.52の記載に
もある通り、いままでに報告は少なくま
たそれらも再検討の必要がある特異な雑種
で、それが日を追うず二宮で発見できた
ことは大変幸運なことと喜んでおります。

コケミズ
（田中一雄）

FLORA KANAGAWA No.43のコケミズに
ついて梅木俊子さんの報文を読み、どこか
で見たような気がしていたが、大磯町の我
家の植木鉢や庭にかなり大量に生えていた
ことを思い出し気をつけている所、5月にな
り庭のあちこちにたくさん生えてきました
大きいものは全長15cmほどに成長し、
記述の通り葉腋に花をたくさん出していました
が、葉の裏に褐色の点ははありませんでした
日陰の植木鉢の中、置き石の周囲や石
垣の際などを好むようです。気をつけて見
れば各地にあるのではないでしょうか。

ヌマツルギク・続報
（奥津均）

ヌマツルギクSpilanthes americana (Mutis)
Hieron.については、この会報のNo.40(1995年
6月)に報告しておりますが、花の咲く時期に
ついて、新しく書き加えます。
原色日本帰化植物図鑑（長田武正著・保育
社）の記述には、「花期は晚秋～初冬」とあ
り、西山俊治氏の1974年11月の標本が元に
なっています。また、当会会員の山田文雄氏
からは1993年11月の採集品について報告があ
りました。さらに、私は1994年12月の採集品
について報告しました。つまり、どの場合も
11月～12月に開花を見ていたわけです。

その後、1996年7月にヌマツルギクの生育
地を訪れえたとき、成長の最盛期であり、それ
ぞれの葉腋に頭花がつき、満開でした。冬咲
きかと思われたものが、夏咲きなので来年も
咲かと期待して1997年7月に再訪しました。期待したとおり、昨年とおなじ満開で、
1メートル四方あたり100個の花を数えました。
舌状花も3～9と冬季の頭花と数にかわり
なく、成長期の6月より咲くことを確認しま
した。ここに、報告します。

付記：上記のことについて、淺井康宏先生に
ご意見をお伺いしたところ「ヌマツルギクは、
原産地では、開花は6～10月頃となっています。
が、が我が国で夏に開花するのが古来の
性質で、最初、初冬に発見(開花)されたの
は、かえって季節はずれだったと思いま
す」というご返事をいただきました。

編集後記
・今回はフロッピーで投稿してくださる方が
多かったので、編集の作業が楽でした。それ
にもかかわらず、発行が遅れたのは、ひとえ
に編集担当の怠慢のなさる業であります。
・次回の総会は横浜市子ども植物園で1998
年2月28日に行われる予定です。詳細は追っ
て連絡いたします。予定をあけておいてく
ださい。
・神奈川県レッドデータ生物調査報告書は残
部がなくなりましたが、植物編は県博のホー
ームページで見ることがでできます。URL
は、http://www2.infoweb.or.jp/KANAGAWA-
MUSEUM/sizen/Kenkyu/kenkyu.htmです。